News Letter

日本精神障害者リハビリテーション学会

ともに創る、ともに暮らす

01 日本精神障害者リハビリテーション学会
　群馬オンライン大会のご報告
01-1 第 29 回群馬オンライン大会学会主催シンポジウム
01-2 群馬オンライン大会　研修セミナー
01-3 研究法入門セミナー
02 IPPO 賞受賞者紹介：コミュネット楽創
03 日本精神障害者リハビリテーション学会
　第 30 回岡山大会のご案内

2023 年 04 月 発行

VOL. 61

【事務局】　〒115-8560　東京都北区赤羽台一丁目 7 番 11 号
東洋大学福祉社会デザイン学部 WELLB HUB-2 20901 研究室（吉田研究室）
https://japr.jp　Mail：japr.jimukyoku@gmail.com

01 / 日本精神障害者リハビリテーション学会 群馬オンライン大会のご報告

実行委員長　群馬県立精神医療センター　須藤友博

大会概要

たくさんの会員の皆様、日本精神障害者リハビリテーション学会第 29 回群馬オンライン大会にご参加いただいて、本当にありがとうございました。予想を上回る合計で 324 人の方が最終的には登録していただいて、大会長を始め実行委員も胸をホッとなでおろしています。今回はコロナ感染蔓延の状況を踏まえて、2022 年 12 月 10 日及び 12 月 11 日の 2 日間にわたってウェブでライブ配信、12 月 26 日から 2023 年 1 月 30 日までオンデマンド配信を行いました。大会テーマを「「できるを増やす」から地域共生社会を創る」として、浅見隆康先生（群馬大学健康支援総合センター）を大会長、後藤雅博先生（こころのクリニック　ウィズ）を大会副会長、福田正人先生（群馬大学大学院）を大会顧問として、理事会の先生方にも多大なるご指導やご支援を賜って、理事の先生方や群馬を中心とした実行委員で準備を進めて、大会開催に至りました。

大会プログラム

群馬オンライン大会のプログラム内容を俯瞰いたしますと、開会式に引き続いて、大会長講演は浅見隆康先生の「メンタルプラスの時代を拓く」でインパクトのあるご発声をいただいて、大会シンポジウムは「何が障壁なのか、バリアを乗り越えるために―群馬における挑戦―」、学会シンポジウムは「パンデミックと精神医療・精神科リハビリテーション；3 年の経験から育んだもの」、昨年に引き続いての共同開催となった心理教育・家族教室ネットワークシンポジウムは「これからの心理教育の効果的な実践について考える―エビデンスからの示唆をふまえて―」といったテーマで交響楽演奏の如くにシンポジストの皆様のご講演やご討議をいただきました。特別講演は萩原朔美先生（前橋文学館館長）の「表現することは、自分を消し去ること」、教育講演は池淵恵美先生（帝京平成大学大学院）の「大人の自閉症スペクトラム障害（ASD）の人への支援」、ミニレク「脳機能からリハビリを探る」、ミニレク「AYA 世代のこころの不調に寄り添う」、ランチョンセミナー「VR（Virtual Reality ）という新しいテクノロジーを活用したソーシャルスキルトレーニング」、ランチョンセミナー「うつ病患者さんの未来に応える～Vortioxetine で変化する治療～」、そして、（研修委員会、総務・企画委員会、広報委員会からの）学会活動報告、野中賞・IPPO 賞講演、閉会式といった豊富な内容でそれぞれの発表者の個性を生かした素敵なソロ演奏を視聴者にお届けしました。会員の皆様の身近な存在である当学会の原点回帰として、一般演題（計 42 題、うち 18 題はオンデマンド配信限定）及び自主企画（計 9 題、うち 3 題はオンデマンド配信限定）と目的に賛同いただいた会員の皆様からも多数の情報発信をいただけたことも手前味噌ながら白眉だと自画自賛しております。また、当学会自慢の前奏曲であった研修セミナーは 4 題に集約

して、「退院できない理由を探すのはもうやめよう～長期在院者の退院支援の政策と実践～」「精神障害をもつ人の地域生活支援の創り方」「リカバリーカレッジを共に創造する」「研究法入門（第２回目）」といったテーマで各セミナーそれぞれ活発な盛り上がりを見せました。

大会を振り返って

群馬オンライン大会を準備段階から当日の状況を思い返してみますと、喜怒哀楽怯に満ちた様々な場面が万華鏡のように脳裏に浮かびます。準備の段階からウェブ会議やメールを通して、理事や実行委員が空間を超えてヴァーチャルに集合して意見交換することができました。学会中は浅見先生の大会長講演でライブ配信が中断するハプニングに見舞われて視聴者の皆様ともどもヒヤッとさせてしまいましたが、群馬オンライン大会の縁の下の力持ちとも言える事務局株式会社 klar のお二人のご尽力で無事に復旧することができました。その時でも威風堂々として武将のように未来を見据える浅見先生の表情が頼もしく思えました。対比的に、人生で大会運営に携わって４回目で初の黒字決済だと笑顔で「二度あることは三度ある。三度あっても四度はない。」と言っていた浅見先生の少年のようなまなざしが印象的でした。私自身は無事に群馬オンライン大会が終了して安心したのか、コロナに感染してしまって、最後のウェブ振り返り会議やオンデマンド配信をコロナ療養ホテルで行うという波乱万丈な展開で、最後の最後で隔離など行動制限及び依存症について身をもって体験する鎮魂歌付きでした。

ウェブ開催は従来の対面式の学会と比較すると、講演時の臨場感や講演後の交流など大幅に制限される一方で、ライブ配信及びオンデマンド配信によって膨大な情報量を提供することができて、現地に足を運ばなくても良い手軽さから簡便に多数の参加を導くことができるというメリットがあります。このまま世の中が順調に進めば、今世紀？最後のオンライン大会が皆様のご協力をもちまして幕を閉じて、久し振りの対面式開催となる岡山大会に聖火？バトン？たすき？を十分な並走距離をもって適切なタイミングで受け渡す段階です。私自身も今回の群馬オンライン大会で交流した皆様と直接お会いできるのを夢見て胸をワクワクさせながら、2023 年 12 月 2 日及び 12 月 3 日の 2 日間に岡山県倉敷市の敷市芸会館で現地開催される日本精神障害者リハビリテーション学会第 30 回岡山大会に足を運ぶつもりでいます。そして、末筆ながら、ヴァーチャル群馬からリアル岡山へ多大なる愛を込めてエールを送りたいと思います。

01-1/第 29 回群馬オンライン大会学会主催シンポジウム
パンデミックと精神医療・精神科リハビリテーション；3 年の経験から育んだもの

内野俊郎　（久留米大学医学部神経精神医学講座）

2020 年から今日まで、人類にとっての最大のトピックが新型コロナ感染症のパンデミックであることに異論は少ないであろう。大規模災害がもともと脆弱なシステムや社会的弱者を最も直撃することは知られていたが、まさに精神科臨床、精神科リハビリテーションの現場は様々なレベルでの困難に直面した。2020 年 11 月に刊行された精神障害とリハビリテーション誌の 24 巻 2 号で「パンデミックと精神医療・精神科リハビリテーション」と題した特集が西尾雅明氏を中心に企画され、パンデミックからの 1 年間で経験された苦労や工夫を読者に伝えていただいた。その後も繰り返されるパンデミックの波に現場は翻弄され続けたが、3 年を経て現場の知見も積み重ねられてきたことから、本シンポジウムが企画された。

第 6 波で職員を除いても 281 名の陽性者が多病棟で同時的に発生するという大規模なクラスターを経験した横浜舞岡病院の院長である加瀬昭彦氏からは当時の生々しい状況や、そこで明らかになった制度上の課題、今後の展望についての報告がなされた。グループホームなんがい・さんすてっぷで共同生活援助、自立訓練を行っている鈴木一広氏からも人員配置や加算に関する制度上の課題が指摘され、社会の分断が生じうるような未体験の災害に対する負荷の大きさが指摘された。今回のパンデミック下ではオンラインでの様々なサービスに注目が集まったが、岩手県立大学看護学部の佐藤史教氏は小中高生に向けた SST をパンデミックの早い時期からオンラインでの実践に切り替えたことでのメリットが報告された。また、人と人とが直接接することへの社会的な抵抗が強まる中、アウトリーチサービスの現場でも様々な困難さが生じたこと、しかし支援を継続していく中で新たなスキルを獲得していったサービス利用者や支援者の姿をちはや ACT クリニックの渡邉真里子氏がリモート社会に対応できずに取り残されている人たちの課題も含めて報告された。シンポジスト、参加者の全てが共有できるテーマであり、聞き手に伝わる臨場感に深い感銘を受けるシンポジウムとなった。

さて、2020 年以降にもう 1 つ大きなトピックを挙げるならばロシアによるウクライナ侵攻があり、ここでも医療や福祉の破綻が生じている。12 年を経ようとしている東日本大震災でも現地の実践者、当事者から悲痛な報告が寄せられた。本シンポジウムで議論されたパンデミック下での経験は、必ずや今後の実践の糧となるものと感じられた。

01-2/群馬オンライン大会　研修セミナー

研修セミナーを実施して

報告

研修委員会担当理事　樽谷精一郎

第 29 回群馬大会での研修セミナーは２度目のオンライン開催となりましたが、無事に予定通り３つのセミナーが実施できました。オンライン開催に伴う様々なトラブルも心配されましたが、会員 63 名、非会員 56 名の方にご参加いただけました。どの研修セミナーも、より自立した地域生活やリカバリーを目指す現場からの声を形にして頂いたもので非常に充実した内容であり、研修セミナー１については私樽谷から、研修セミナー２については池田理事から、研修セミナー３については坂本委員から報告させて頂きます。

次回の第 30 回岡山大会は久々の現地開催となります。研修セミナーも楽しんでいただけるように企画しますので、どうぞお楽しみに！

１．研修セミナー１

＜「退院できない理由を探すのはもうやめよう～長期在院者の退院支援の政策と実践」＞

研修セミナー１は植田俊幸先生を中心に企画されました。群馬病院からは実際に長期入院された患者さんに登壇いただき、担当医の工藤由佳先生や病院スタッフの方が力を合わせて退院に向けた「意思決定支援」をおこない退院に至った経緯を聞かせて頂けました。担当医の工藤先生はなんとイギリスから！ご参加いただき、途方も無い距離を超えて同じ場に集うことができたことは、オンライン開催の賜物かも知れません。

長期入院という非日常な日常の中で、患者さんも支援者も意思決定について鈍化してしまう怖さを強く感じるとともに、意思（の共同）決定を経て地域生活を勝ち取られた患者さんや支援者の誇らしさや力強さを体感できました。現場の小さく大きな一歩がこの国の精神保健福祉を前に進めてくれる、そんな思いで胸が熱くなったセミナーでした。次回以降も、より沢山の方にご参加頂きたいと思います。

２．研修セミナー２

大会委員会担当理事・群馬大会実行委員

池田　望

＜精神障害をもつ人の地域生活支援の創り方～できるを増やすと精神科医療の役割は変化する～に参加して＞

本研修セミナーでは北海道十勝の地で、精神障害を持つ人への先進的な地域生活支援を実践してきた NPO 法人十勝障がい者支援センターの門屋充郎先生にお話しをいただきました。1970 年代当時、まだ地域生活支援がほとんど機能していない頃からのご自身の体験を基に強調されたのは、入院医療に依存する医療や社会の問題、社会モデル・生活モデルに基づく支援の必要性、病院医療からのケアの分離とそれによって地域生活支援の資源を誰もが使えるようにすること（オープンシステム）の重要性です。十勝地域はそうした取り組みの結果として、人口 10 万人当たりの精神病床数は全国平均の３分の１を下回っているそうです。セミナーの終わりには、地域生活支援の創り方に関する多くの提言と、番外編として

精神保健福祉法の大幅な再編や新たに精神疾患対策基本法をつくる必要性にも言及されました。実践に基づく具体的なお話と大局的な見地からの提言には「人」として生きるための支援という視点も貫かれており、精神障害リハビリテーションに携わる者が取り組むべき地域創りの理念と方向性を示していただいた研修であったと思います。

3．研修セミナー３

久留米大学文学部社会福祉学科　坂本明子

＜「リカバリーカレッジを共に創造する」＞

研修セミナー３は坂本が栄セツコ先生と一緒に企画いたしました。また、リカバリーカレッジOKAYAMA、リカバリーカレッジ名古屋、リカバリーカレッジふくおかを運営しているメンバーにも来ていただきました。まずは、リカバリーカレッジとはなにか、基本的なことをご説明しました。リカバリーカレッジは、精神保健サービスのリカバリー志向への変革としてイギリスで誕生しました。もっとも特徴的な点は、教育的アプローチで個人のリカバリーに役立つ講座を開講し希望する者はだれでも受講できること、専門職と精神疾患の経験者がコ･プロダクションで、運営、企画、実践していることなどです。その後、各リカバリーカレッジの実践についてご報告いただきました。実際の取り組み以外にも、リカバリーカレッジに関わる中でのリカバリー体験など個人的な経験や想いをお話しいただきました。またフロアからの質問に答えながら、〝学びの場を共に創造すること〟について深めていきました。コ・プロダクションで実践する上で、ピアサポーターと専門職という立場の違いによるわかりあえなさや、それを乗り越えていく苦労や成長について語られました。リカバリーカレッジでは、専門知、経験知のいずれも提供されること、受講生とともに学びあうこと、その中から自分に役立つことを選択し実践することを大切にしています。本研修セミナーもそのような場であったらとおもいます。

01-3/研究法入門セミナー

研究・実践委員長　松田　康裕（大阪精神医療センター）

第 29 回群馬大会時研究法入門セミナーは、新型コロナウイルス感染症拡大のため現地で開催することができず残念でしたが、昨年度同様にオンラインにて 3 回シリーズで開催することとなりました。

第 1 回は松田より「実践から研究の芽を見つけ研究に育てるコツ」について、安保理事より「実践から研究へ－私の指導経験を踏まえた事例の紹介－」についての 2 つの内容を、2022 年 10 月 1 日から 2 か月間オンデマンド配信しました。6 名の事前申し込みがありましたが、最終的には 5 名の参加となりました。5 名とも学会もしくは発表会での発表経験および研究に関わった経験がある方でした。内容に関するアンケートは、理解度と役立ち度ともまずまずの評価で、「動画を何度も視聴できるので整理できる」とのオンラインの強みを反映した感想や、「量的研究の実施となるとハードルが高い」との声を頂きました。

第 2 回は第 1 回目の研修を受けて、参加者が事前に臨床疑問を、PICO/PECO の形に整理し、リサーチ・クエスチョンを作成したうえで、2022 年 12 月 11 日に 4 名の参加者と 4 名の講師陣（松田、安保理事、半澤理事、安西理事）とで議論したり、助言したりし、熱く濃密な 2 時間を過ごせました。内容に関するアンケートとして、理解度と役立ち度とも高評価でしたが、「研修時間が短い」との回答が多くを占めていました。また「CQ から RQ へというステップとしては、この入門講座は大変有益でした」「ディスカッションの時間がとても有意義でした」との感想や、「量的研究の知識があまりないため、入門書を教えて欲しい」との要望も頂きました。

第 3 回は 2023 年 5 月 28 日に学会発表や研究実践に向けたフォローアップ支援を行う予定です。

今年度の参加者の声を反映しながら、次年度も 3 回シリーズで開催する予定ですので、是非ご参加をお待ちしております。

02 / IPPO 賞受賞者紹介：コミュネット楽創

実践賞委員会

受賞者紹介

受賞者と IPPO 賞について

2022 年度日本精神障害者リハビリテーション学会 IPPO 賞は、北海道札幌市で就労支援を展開する特定非営利活動法人コミュネット楽創が受賞しました。コミュネット楽創の皆さまには、改めてお祝い申し上げます。

IPPO 賞は、旧ベストプラクティス賞を引き継いだ実践賞あり、正式名称は Interactive Person-centered Practice and Organization（和訳：双方向性かつ当事者中心の実践・機関）です。2022 年度の IPPO 賞の選考過程では、応募機関の申請書と IPPO 賞の 10 基準※を照らし合わせ、3 機関がノミネートされました。その中から、最終的にコミュネット楽創が選出されました。

※ https://japr.jp/lecture/bestpractice/

コミュネット楽創の支援の特徴

今回、IPPO 賞を受賞したコミュネット楽創は、多くの特徴がありましたので、概要を紹介したいと思います。コミュネット楽創は、Individual Placement and Support（以下 IPS）モデルに準じた就労支援を展開する法人です。特に、「ZERO EXCLUSION（排除する基準を設けない）」を合言葉に障害や疾患の種別や軽重に関わらず、本人の希望と意志、個別性、即時性を重視して、一般企業への就労に重きを置いた個別サービスを提供していることが大きな特徴です。実際、同法人は精神障害当事者だけでなく、がんの当事者に対する就労支援や入院中の患者への働き掛けもおこなっています。

IPS モデルという点において、コミュネット楽創の就労移行支援事業所は、毎年フィデリティといわれるツールを用いた、第 3 者評価を受けています。障害福祉サービスにおいては質の評価が重要と言われて久しいですが、同法人は外部評価によって自法人の支援の品質管理を行ってきました。実際、日本の修正版 IPS フィデリティ評価において、2 つの事業所は、毎年、非常に高い得点を維持し、個別就労支援の質を担保しています。

コミュネット楽創の支援は、ストレングスアセスメントを用いて、当事者の長所を把握することに始まり、当事者の希望や好みに応じて、就労支援と生活支援をセットにして行う点が特徴です。また、その支援は、アウトリーチを主軸としており、就労先への訪問支援だけでなく、出退勤の移動中や本人が安心して話せる場所（カフェ・公園・自宅など）に積極的に出向きます。さらに、就労先の開拓にも非常に力をいれており、障害者雇用に限定されない支援を行っている点も大きな特徴の一つです。その結果、2004 年の開設以来、総計 1,000 名を超える一般就労者を輩出しています。特に、同法人の就労移行支援事業所コンポステラは、就労実績も顕著であり、長年、北海道内で就職数 1 位となっています。

個別就労支援に加えて、同法人の事業所は家族の相談支援、OB 会などを定期的に開催しています。また、必要最小限ではあるが、元気回復行動

プラン（WRAP）や社会技能訓練（SST）などの集団支援も提供しています。言い換えると、同法人は、本人のエンパワメントに資することを目的としたオーダーメイドの包括的な支援を実現しています。

コミュネット楽創の運営の特徴

コミュネット楽創では、法人サービスの元利用者数名が運営委員の責を担っています。ただし、同法人は、当事者と非当事者を分け隔てる視点をそもそも持たず、さまざまな経験や知識を持つ一人の法人会員として、精神疾患や障害の経験を持つ者が運営に参加していることを強調している点も付け加えておきます。また、法人内で、各事業所の登録者数、利用者数、就労者数、そしてアウトリーチ数等の推移についてグラフで可視化して、日常的な実践のモニタリングにも取り組んでいます。さらに、同法人は、障害福祉サービスという領域にとどまらず、町内会の祭事にも毎年参加出店し、近隣の住民との交流の機会を設けています。それに加えて、絵本の貸し出しをする活動を続ける中で、地域住民との交流を実現しています。

コミュネット楽創は、支援や地域形成だけでなく、就労支援を中心に様々な研究活動に協力してきた点も特徴の一つといえると思います。具体的には、国内の IPS モデルの検証や就労移行支援事業所の評価尺度の作成にも関わってきました。支援―地域―研究という 3 つの活動を精力的に展開しながら、支援の質を維持・向上するサイクルを有する法人の活動は、効果的な実践の体系化や普遍化にも貢献していると考えられ、精神科リハビリテーションの目指すべき形の一つといえるかもしれません。

人材を大切にするコミュネット楽創

コミュネット楽創は、その理念に「自分力をいかし、そしてわかちあう」を掲げており、人財育成にも力をいれています。具体的には、職員ひとり一人が、それぞれ持つ力、学ぶ力などをいかし、お互いのために発揮していけるように、研修や個別スーパービジョン・グループスーパービジョンなどを通して人材育成を図っています。特筆すべきは、常勤 1 人当たり年 6 万円（旅費は別途支給）を研修費として予算化し、年 1 回の道外研修を義務付け、学会発表に対する賞状・奨励金を用意し、外部研修・学会参加を推奨している点です。また、その理念を具現化できるよう、人事評価も、成果評価ではなく行動評価による人事考課制度を導入しており、各自の目標、勤務上求められる知識と技術・規律・姿勢・技術・コミュニケーション・学びなどについて 1 年間を振り返り、評価を給与に反映しています。これら取り組みの結果、コミュネット楽創の職員は、日本精神障者リハビリテーション学会をはじめ多様な学会に参加し、自身の取り組みを発表しています。

コミュネット楽創では、キャリアに合わせた全世代向けに研修体制が構築されています。新入社員に対しては入職時に法人理念、対人援助職として職務遂行上の心構え、就労支援・IPS などについて、全職員対象には年数回、就労支援、医学的視点、支援技術・哲学、理念等の研修を実施しています。さらに、次期リーダー育成のためには次世代マネージャー研修を設けています。

雇用体制については、正規職員としての採用を原則としており、その時代にあわせた待遇改善や工夫も積極的に行われています。例えば、独自の福利厚生も考え、休日の稼働していない社用車の

従業員への貸出制度があげられます。また、子育てや介護等、様々な事情を持つ職員の働きやすさの観点から、フレキシブルな勤務ができるような制度設計（時間単位有休・契約時間の変更等）など、直接賃金アップ以外の部分でも働きやすい職場づくりをしています。特に子育てや介護については、子が出生した職員へのお祝金制度や、育児休暇手当・育児特別手当、介護休暇取得者には介護休暇手当の支給を実施し、家族を大事にした制度づくりをしています。実際、2000 年には子育てをしている職員が 1 名もいなかったそうですが、現在は 19 名の常勤職員のうち 6 名が子育てをしながら働いているそうです。

コミュネット楽創を知りたい方へ

ここまで、IPPO 賞を受賞したコミュネット楽創の活動を紹介してきました。しかしながら、本ニューズレターで紹介できる同法人の長所は、実際の特徴の一部です。「コミュネット楽創の活動をもっと知りたい」とお考えの方は、ぜひ直接担当者へご連絡をいただきたく思います。

特定非営利活動法人コミュネット楽創
総務部 本多
〒001-0016
札幌市北区北 16 条西 4 丁目 2-35　吉江ビル 2F
TEL: 011-788-8199 FAX: 011-788-6144
E-mail: communetrakusou@yahoo.co.jp

2023 年度 IPPO 賞への応募のお願い

実践賞委員会は、2023 年度も多くの機関に IPPO 賞に申請していただきたいと考えています。2022 年度の IPPO 賞を受賞したコミュネット楽創は、就労支援を中心に長年の蓄積があり、札幌市内で非常によく知られる機関でもあります。一方で、IPPO 賞は、将来が期待できる実践やキラリと光る先鋭的な実践も表彰したいと考えています。また、IPPO 賞受賞機関だけでなく、ノミネート機関もホームページで紹介します。私たちは、IPPO 賞が応募機関の素晴らしい実践を全国に知ってもらうきっかけになることを願っております。つきましては、ぜひ多くの機関に応募をお願いしたく存じます。

03 / 日本精神障害者リハビリテーション学会 第 30 回岡山大会のご案内

山田了士（地方独立行政法人岡山県精神科医療センター）

第 30 回日本精神障害者リハビリテーション学会を 2023 年 12 月 2 日、3 日（土日）の 2 日間、岡山県の倉敷市芸文館にて開催させていただくことになりました。30 回という節目の大会を担当させていただくこと、まことに光栄に存じます。手探りながら理事会はじめ多くの皆さまのお力添えを頂いて、是非意義ある大会にしていきたいと存じております。

今回は現地開催のみとし、オンラインの併用は予定しておりません。3 年ぶりに皆さまが会同され、厚い旧交や新たな出会いをお楽しみ頂きたく存じます。先行き誠に不透明な中、皆さまと対面でお会いし親睦を深めるという、そのことだけでも一条の光となってもらえたらと切に願う次第です。

テーマは「暮らしのためのリハビリテーションを問い直す」といたしました。リハビリテーションの目指すところの暮らしとは、どのようなものなのかという問いがあります。精神科リハビリテーションは、自立した生活を目指す動的な復活への道であり、他方では安心できる居どころを見つけるための静的な安定への道でもあるでしょう。個々の患者さんの当面の目標は、その静と動の間のグラデーションの中で、状況によって常に変わっていきます。医療や福祉の提供者は、患者さんの事情に基づく方策を考えるわけですが、ややもすると物語を勝手に作り上げて納得し、固定した物語の方に患者さんをあてはめてしまうこともあるかもしれません。さらに、医療や福祉には、どうしてもあれこれの都合があり、それが患者さん本来の希望と齟齬を生じることもあります。こうした色々な問題を「問い直す」機会として、特別講演、教育講演、シンポジウム、自主プログラム、研修セミナー、一般演題、さらに県民公開講座も設け、当事者の方々のご協力をいただきながら魅力的なプログラムを作って参りたいと思います。

会場の倉敷市芸文館は、倉敷美観地区に隣接しており、大原美術館や倉敷アイビースクエアなど、観光資源や商店が豊富な立地にあります。空き時間に付近を散策して、リフレッシュしていただける非常に楽しい場所です。

皆さまとお会いできますことを心から楽しみにいたしております。

編集後記

ニューズレターNo.61 をお届けします。今回はお届けが遅くなりました。

広報委員会では現在、学会のロゴマーク作成へ向けた調整を行っております。

しばらく先になりますが、会員の皆様にもロゴマーク作成へ向けた審査にご協力いただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

また、今年度は学会を紹介するリーフレットの作成にも取り組んでまいります。

学会のホームページやニューズレター発行をはじめとした広報委員会の活動について、ご意見やご感想をいただければ幸いです。

引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

広報委員会

News Letter
VOL.61

2023 年 04 月発行

日本精神障害者リハビリテーション学会

【事務局】
〒115-8560　東京都北区赤羽台一丁目 7 番 11 号
東洋大学福祉社会デザイン学部 WELLB HUB-2 20901 研究室（吉田研究室）
https://japr.jp　Mail：japr.jimukyoku@gmail.com